

ホッブズの哲学における自由主義 (I)

吉 田 達 志

人文社会教室

(1990年9月1日受理)

Liberalism in the Philosophy of Hobbes (I)

Tatsushi YOSHIDA

Department of Humanities

(Received September 1, 1990)

In his inquiry into the meaning of Hobbes's philosophy, Andrzej Rapaczynski, the author of "Nature and Politics, Liberalism in the Philosophies of Hobbes, Locke, and Rousseau", consciously opposes the trends prevailing in most recent interpretations and presents a qualified defense of the more traditional point of view. Apart from its moralist condemnation of Hobbes's view of human nature, Rapaczynski believes the traditional view of Hobbes as a positivist is much more coherent and interesting than the effort to make him into a moralist. Also, Rapaczynski finds the attempt to detach Hobbes's political theory from the naturalist background in which he set it and to impart either a moralist or a prudentialist doctrine to his teaching both unnecessary and misguided. Rapaczynski finds it unnecessary because he thinks that a cogent interpretation of Hobbes is possible without denying the unity of his thought or basing his political theory on a moral system; as a matter of fact, Rapaczynski believes that only such an interpretation is compatible with what Hobbes actually wrote. And Rapaczynski finds this misguided because, contrary to what has been said on this subject, Hobbes's insights become more interesting under the more traditional interpretation. His crucial investigation into the problem of legitimacy of political power is, in Rapaczynski's opinion, only obscured by confusing the question of de facto legitimacy with moral or prudential considerations.

The aim of this paper is to introduce Rapaczynski's indication that the very importance of Hobbes's philosophy for the development of liberal political thought is connected with the positivist, descriptive character of his theory.

一 序

この論文はA. ラパチンスキイ著『自然と政治——ホッブズ、ロック、ルソーの哲学における自由主義』(Andrzej Rapaczynski, *Nature and Politics, Liberalism in the Philosophies of Hobbes, Locke, and Rousseau*, Cornell University Press, 1987)の第一部、ホッブズについての論説を要約して紹介しようとするものである。先ずラパチンスキイは本書の「前置き」の中で次のように述べている。

自由主義の哲学的基礎の意味は、それが取って代わろうとした世界観の背景と対比して初めて理解することができる。古典的なアリストテレスの見解においては、物を生産するということは不面目な宿命であって、人間の奴隷化状態の源泉をなしていると見られていた。中世の見解においては、肉体的必要物を満たすということは、せいぜいのところ救済の追求からの逸脱だと見られてい

た。こうした伝統的な見解とは対照的に、初期自由主義理論によって人間の生産能力というものは人間の自己実現の中心テーマをなしていると主張された。つまりこの能力によって、人間は未知の自然を改変して自らの世界に取り込んだり、人間としての尊厳と安楽を保証したりして、自由の最高の形態を達成するというのである。

本書は、自由主義の世界観の哲学的前提を探求し、合わせて自由主義的政治理論と近代自然科学との間の関係を浮き彫りにしようとするものである。これら二つの思想を決定的に結びつける作業を行っているのは、ホッブズの理論とロックの理論であって、そこでは人間は真理または不死の探求者としてではなく、欲望を追う動物として把握されている。

本書におけるホッブズ理論についてのラパチンスキイの分析が彼の思想に関して広汎に行き渡っている近代の解釈と異なっている所以は、ホッブズが人間性について純粋に記述的、機械論の説明を与え、その上、道徳的義務と政治制度の本質についての理論をこのような説明の

上に基礎づけようとする試みを重視している点にある。更にラバチンスキイは次のように主張する。即ちホッブズ思想に含まれている社会契約というのは、そこから国家の正統性が引き出されるべき人為的、(おそらくは仮言的) 協定としてではなく、むしろ多くの人々の信念が現実(完全に意図せずして)たまたま一致したものだとして理解されるべきであり、そのような偶然の一致が自己充足的予言の形式を通じて服従を強制する国家の権力を発生させるのである。人間が先ず互いに殺さずにはいられない敵同士として直面し、次いで政治社会に結集するのは、人間が(合理性を有しているからというよりも)誤まりと不合理を犯す独特の傾向を有するからであり、更には誤まった信念のいくつかを実現する能力を有しているからでもある。ともあれ、ホッブズは、政治理論を基礎づけるために近代科学を利用した最初の人であった。

次にラバチンスキイは、「序文」の中で次のような議論を展開している。

ロック、ルソーと共にホッブズも近代科学の誕生と近代以前の基本的な知的枠組の崩壊によって粉碎された政治の哲学的基礎の再建に関する最も重要な論点を徹底的に検討した。ホッブズ、ロック、ルソーの三者が共有した信念とは、アリストテレス的ないしは中世的世界観はもはやその中に彼らの時代の政治生活を位置づけるのに適当な枠組を提供することはできないし、近代政治の現実には新しい概念化を必要としているということであった。

17世紀のイングランドは非常に騒然とした国であったし、将来の政治制度の形態はまだ確定していなかった。スチュアート王朝時代の政治においては宗教論争は死活的重要性を持っていたにもかかわらず、当時のたいていの主だった政治思想家は、最終的に具体化する政治構造の性質がどうであろうとも、その政治構造の正統性は専ら神学的基礎の上に立脚させるのは不可能だということを理解していた。また彼らは、将来の経済的發展が政治組織の問題を解決するとは想定しなかった。それどころか彼らは、国家の物質的繁栄は正しい政治的解決策を発見するかどうかにかかっていると信じた。彼らが直面した問題は、単にそのような解決策を発見するだけでなく、そのような解決策を「正当化する」こと、即ちそうした解決策を彼らの同時代の人々が同意できるような、より広い信念体系の文脈の中に位置づけるということでもあった。彼らは17世紀文化の最も顕著で、最も有望な特徴と思われるもの、即ち自然についての機械論的学問とその哲学的基礎へと注意を向けたのである。

新しい自然の見方は、彼らに新しい社会の見方を示唆した。目的因と対立する動力因という考えが強調されるようになったから、彼らは社会的、政治的制度はそれを

設立する諸個人の間での事前の取り決めとは無関係であるような、固定化された目的を有しているとする想定に警戒心を払うようになった。目に見える世界を自然についての観念的な模型によって置き代えるという科学的手続を用いて、彼らは人間事象においても同様の区別を探索し、歴史状況の偶然による産物に対して人間の自然状態を対置させた。近代科学の経験主義の故に、彼らは物事の実際のあり方とそのあるべきあり方との間の区別に敏感になった。近代科学に伴う合理性という概念の影響を受けて、彼らは人間という概念の意味について再考するようになったし、諸個人が政治制度について抱いている期待感を再評価するようになった。科学がいつの日にか人間をして自然世界を支配するのを可能にするであろうという希望を抱くが故に、彼らは人間とその環境との間の関係に益々注意深くになったし、更に彼らは知識を利害というものとは無関係な観照という形態ではなく、生活の安楽と便宜に向けられた、人間の生産努力のための道具だと見なすようになった。したがって彼らは、もはや劣位にあるテクネー (techné) と優位にあるエピステメー (epistémē) とを分けるアリストテレス的区分には同意できなかったし、更にはその基礎をなす自由な行為 (praxis) とその実現に奉仕するための生産の領域 (poiesis) との区分にも同意できなかった。最後に、あらゆる物体を単純な要素に分解しようとする、新しい科学的方法のノミナリスティックな前提の影響を受けて、新しい社会科学の唱導者達は社会制度の意味と機能をそれを構成する諸要素としての諸個人に関連づけて説明しようとする試みに自信を抱いた。このノミナリズムは、それ自体としては必ずしも自由主義的政治観を導き出さないものであるが、それでも初期自由主義にとっては大いに重要な意義を有していた。というのはノミナリズムは、社会内の個々の構成員に対する社会の自然的優越性を主張するアリストテレスの説を容認しなくなったからである。これ以後、最も権威主義的形態を取った政府でさえも自らを正当化するためには個人の利益に訴えなければならなくなったし、社会はそれ自体、大きな利益を有していて、諸個人は社会に参入することによってその利益に与るのだと主張するのは極めて困難になった。個人と社会との間の関係を説明するためには、個人としての人間の概念から出発しなければならない。したがって、社会の構成要素について詳細に記述できなければならない。人間は社会的、政治的關係からの派生物ではなく、そのような関係の出発点となったのである。

前社会的人間という理論が考案されたのは、こうした背景の下においてである。原自然状態という前提が歴史的仮定であろうと、あるいは哲学者の仮構であろうと、このような考えは、個人としての人間が社会的相互作用

に自然的に先立つという重要な前提から引き出される。新しい政治理論の課題は、人間の自然状態という概念の助けを得て、このような個人がどのように存在しているかを描き、そしてそのような分析の結果を市民の権利と義務に関する理論の中に移し入れる点にあった。こうした移入が可能であることを説明するのが、社会的、政治的現象への契約論的方法全体の本質なのである。

ホッブズ、ロック、ルソーの三人の契約論者は、このような一般的方法の可能性を探索し始めた。彼らは、「自然」という言葉が近代科学によって指摘された機械論的体系を意味しないならば、政治の正当化の体系はいかなる自然現象にも助けを求めることはできないであろうと考えた。例えば自然法と自然権の理論は、政治哲学の中で長い歴史を有している。しかしホッブズ、ロック、ルソーの自然法への要請と彼ら以前の時代の政治理論とを区別するものは、彼らが自然は道徳のないしは擬似道徳的規範の助けで作動するのではない、即ち自然は命令したり、容認したり、非難したりするものではなく、力を振るい、動かし、力を喪失させるものだと考えた点にある。それ故、自然法がある政治体系を正当化するために用いられる以前に答えられねばならないと彼らが見なした問題は、機械論的自然の法則の作用が規範的原理の体系を導き出すための十分な根拠を用意しているかどうかということであった。この問題こそが、初期自由主義理論の決定的な争点の所在を明らかにしている。

また、ホッブズ、ロック、ルソーの三人は、政治哲学の課題についても認識が一致している。彼らは最初の、自発的な社会的相互作用の型態は、協調ではなく競争だと信じた。競争は社会的に有益な相互作用の型態ではなく、社会契約によって設立される社会秩序が弱化させねばならない遠心力だと見なされた。社会に先立つ人間の状態は生存のための闘争の状態であって、そのことが安全を各個人の最大の関心事にするのである。これら三人の契約論者によると、人間の合理性とはありうべき損失があたかも現実には生起するかのように対応する能力を意味している。したがって人間の要求と欲望には生まれつきの、あるいは自然の限界はないから、このことは人間同士の間には紛争という状況をもたらす。三人の思想家は各々、結果として起こる「万人の万人に対する戦争」にそれぞれの仕方に対処する。ホッブズは、人々の上にそびえる威圧的な権力の設立のみが解決策として呈示できるものだと考える。ホッブズによれば、人間の要求と欲望は無制限であるという事実は必然的でもあり、自然的でもある。このようにホッブズは人間の個人性という概念を擁護しようとするが、この概念は自由主義理論の最も基本的な特徴を提示している。

さて、ラバチンスキイは、ホッブズに関する議論の中

で初期自由主義の重要な前提を解明しようとしている。けれども彼はホッブズを自由主義者に仕立て上げようとしてはいないし、そのような試みを見当違いだと考えている。彼がホッブズ哲学の中で関心を抱いているのは、主として人間行動の本質を探索する上で視点の転換がなされ、自由主義的個人主義について最も重要な戦略のいくつかが実行された点である。彼は、ホッブズの政治的、道徳的見解の独創性を否定したり、その思想を政治的権利に関するキリスト教の教義の副産物だと言ったりする多くの注釈家には余り共感していない。更に彼は、ホッブズの理論を実証主義者による理論として解釈する。そう解釈することによって彼は、ホッブズの政治理論とその一般的な機械論的哲学とを一つの思想的統合体として見なそうというのである。それは彼が次のような信念を抱いたことの結果である。つまり、「自然法」は思慮による規範だとする解釈は、ホッブズの教義体系は統一体をなしているとは見なさないように要求してくるのみならず、まさしくホッブズの政治理論の最も基本的な特徴のいくつかをも説明することができないが故に究極的には支持できない、と。

また、実証主義的解釈は、それが近代政治制度についての基本的な哲学的擁護論の一つを明らかにしてみせるが故に、それだけで追求するに値する。既に触れたようにラバチンスキイは、ホッブズが自由主義者としての資格を十分に有しているとは考えていないし、そう考えるためにはホッブズの政治理論をひどくねじ曲げなければならないと言う。特に彼は、ホッブズの絶対主義をその政治的提案の非本質的な特徴だとは決して見なしていない。それにもかかわらず、正にホッブズの実証哲学が明らかに近代的視点を人間行動に導入したし、このような背景の下で自由主義理論はその個人主義的哲学を発展させたとは彼は考えている。ホッブズは、近代科学の完全に機械論的な世界観の政治的帰結を吟味したり、政治的なものの個人的なものへの優越を主張するアリストテレス的、あるいはキリスト教的神学に基づく政治理論を拒否したりしようと試みた最初の人である。このような観点から読まれるならば、ホッブズの議論は、例えばヒュームやバークによって代表される、後の政治思想の「自由主義=保守主義」学派によって採用された議論の予告となっているのである。政治的正当化ということは、それがたとえ絶対主義的統治形態を擁護する場合であっても、純粋に社会的、共同体的価値に還元しえない個人の利益に訴えなければならないことを明らかにした点に、この議論の自由主義的側面を見ることができる。したがって政府は、秩序を維持するという、もうそれだけで巨大となっている仕事以上の課題を自らの上に担うべきではない。秩序の維持は自由とは両立できないという

ことはない。事実それは、市民による幸福の自由な追求を保証するための枠組であり、市民の身柄の安全のための必然的な条件でもある。

ホッブズが近代自然科学から政治哲学を引き出したことは、自然主義的政治哲学にとって別の決定的に重要な意義を有している。それは、自由主義の批判者が典型的に自由主義的方法だと見なす政治理論の形態を指している。自由主義の最も重要な批判者であるルソーは、次のように論じている。即ち近代自然科学は正義についての真に規範的な理論を提供することはできず、したがって実証哲学の帰結としての自由主義はその道徳的立場を支える哲学的な基礎を欠いているのである、と。ルソーからマルクスを経てシュトラウスと現代のマルクス主義者に至る批判者達によって浴びせかけられた自由主義への非難は、まさしく近代科学の純粋に記述的で分析的な性格は規範と価値の問題とからみ合っている社会的、政治的現象を正当に取り扱うことは本質的に不可能であるという確信に根ざしている。この点に関して、実証哲学論者として解釈されたホッブズは、反自由主義の批判者にとって主たる攻撃的的なのである。このような解釈に立つならば、実際ホッブズはその政治体系から神学の要素を排除しているし、政治生活についての伝統的な、規範的説明を純粋に記述的な政治科学へと改変している。こうしてラパチンスキイは、ホッブズの実証哲学が及ぶ範囲についてはもっともな反論があるとしても、彼の思想の輪郭をはっきりさせ、その著作をすべて *de jure* な考察を *de facto* な分析に還元しようとする一貫した試みだと解釈する思考実験を行おうと決意する。彼はその実証哲学論的解釈は次の三つの事柄に資するとする。第一に、自由主義の哲学的基礎に議論的を絞るために。第二に、*de jure* な問題から *de facto* な問題への転換は、完全に新しい、かつそれ自体として興味深い政治理論を開示していることを明らかにするために。第三に、たとえ近代自然科学の世界観と密接に結びついているとしても、あらゆる型態の自由主義がその精神において実証哲学的だとは限らないという主張への道を開くために。実証哲学自体が近代科学についての議論の余地のある解釈だとするならば、事実と価値とを、記述と命令とを厳格に区別するのは条理にかなった提案だとするのは同じように議論の余地があると言わなければならない。けれども、もしもこのような区別が放棄されるか、あるいは修正されるならば、自然科学の世界観と自由主義についての規範的な社会的、政治的理論との間の溝に架橋するという困難は、見せかけのものであることが判明するであろう。また、それと共に、自由主義の見解についてよく指摘される相対主義またはニヒリズムだという評も消滅するであろう。実証哲学的還元から自由主義の道徳的基

礎の樹立への移行は、ラパチンスキイの意見によるとロックの哲学の中に見出されるべきなのである。

ニ ホ ッ ブ ズ

『リヴァイアサン』の出版以来ずっと、ホッブズの著作についてはたいいていの読者によって表面的な評価が与えられてきたにすぎない。ホッブズは、アリストテレス的、神学的国家概念を攻撃したり、政治的義務についての道徳的、宗教的基礎を掘り崩して宗教それ自体の価値を拒絶したり（権威の手にある道具としての宗教は別として）、正義の概念を力の概念に還元したりした人と思なされた。こうした解釈は疑いもなくホッブズの著作を大ざっぱにしか読まないことによるが、その理由はホッブズが疑問視した道徳的諸前提の影響を受けて彼に敵対心を抱いた点にある。ホッブズにおいて道徳とは無関係である事柄までも、一般に不道徳そのものと見なされた。その科学的傾向からして、ホッブズは政治権力に対して価値判断をくだすことによりも、それを記述することにより関心を抱いていたと言いうるのであるが、けれどもその傾向が道徳問題、それに特に宗教問題に対する彼のシニカルな態度を十分埋め合わせているとは必ずしも見なされなかった。古い学派に属する解釈者達が、ホッブズが「力が正義をつくる」という教義に固執するのを冷笑家による道徳の拒絶にすぎないと見なしたのは明らかに誤まりであった。多くの点で疑いもなくホッブズはシニカルであったが、彼は「力が正義をつくる」という命題を冷静に、かつ本気で主張したのである。この点で実際、彼は道徳哲学と政治哲学の歴史の中で独特の位置を占めている。彼よりも以前のソフィストやマキアヴェリと、彼よりも後のいわゆる「現実政治」の支持者達は、ホッブズと同じような主張をして来たように見えるかもしれない。しかしながら、ソフィストの理論は単にその急進的な相対主義の結果にすぎないし、マキアヴェリは実際には道徳家であったし、「現実政治」の支持者達はごく一般的に言って単なる冷笑家にすぎなかったのに対して、ホッブズは力と正義はある政治体制の正統性を樹立するに際して相互に補強し合う、不可欠の二つの要素であること、しかもこれら二つの要素はその公分母との関連で分析される時のみ理解しようということを明らかにしようと企図した精巧な理論を呈示したのである。

だいたい1930年代に、伝統的な解釈に対する反動が起こった。ホッブズの政治的著作に対する新しい型の解釈は、A. E. テイラーとレオ・シュトラウスによって提起された。彼らの解釈は、その多くの相異点にもかかわらず、伝統的解釈の最も基本的な主張の一つ、即ちホッブズの倫理理論と政治理論は彼の自然についての機械論的

理論と統一体をなしているという主張との決定的な断絶を刻印している。テイラーは、ホッブズ思想におけるこれら二つの部分は互いに矛盾しており、したがって別々に解釈されるべきだという、より穏やかな主張を行った。これに対してシュトラウスは、ホッブズはその基本的な倫理の見方と政治の見方とをガリレオ型の自然科学を知る以前に開拓していて、その機械論の哲学を既に前もって完成させていた政治理論の上に重ね焼きしたのだということを示そうと試みた。

伝統的な解釈との決定的な断絶を示すもう一つの例として、ホッブズの政治思想の中に明白なる道徳理論を読み込もうとする試みがある。伝統的な解釈者達は、ホッブズの道徳からの中立性と有力な価値体系への不道徳的な攻撃とを混同したのに対して、新しい解釈者達は、ホッブズの理論の中に倫理体系がはっきり刻み込まれているのを発見したと主張した。ハワード・ラレンダーは、ホッブズの政治理論は中世の神学的基礎の上に立脚しており、したがってもしもその伝統的な道徳内容と前提が無視されるならば、それを正しく解釈するのは不可能だということを示そうと試みた。他方、シュトラウスによれば、ホッブズはアリストテレス的、キリスト教的な型の倫理を人間の情念に基礎を置く正義についての新しい理論によって置き代えようと試みたが故に、道徳理論の領域における急進的な革新者であった。けれどもどちらにしても、これらの解釈者達はホッブズの政治理論を道徳の本質を有する規範的主張の体系だと見なした。更にこうした解釈系列に沿う後の多くの著述家達は、ホッブズ理論の道徳的前提と、命じようとするよりも記述しようとする傾向を有する孤立した科学者としてのホッブズ像とは両立しないのみならず、彼の著作が思慮による計算の体系に照して社会的、政治的制度を吟味しようとしていると見なすのは不適当な解釈であることを示そうと試みた。

このようにしてホッブズの著作についての諸解釈は、益々テキストの意味から離れて行ってしまった。確かにこれらの解釈の多くが、これまで無視されてきたホッブズの著作の側面に対する我々の理解を豊かにし、学問的興味を新たにするのに貢献した。しかしラバチンスキイにとって最も不満な点は、彼らがホッブズのもっと暗い、懐疑論に立った思想のいくつかと本気で取り組んでいないことである。実際、ホッブズの著作の中に道徳的内容を盛り込もうとして、最近の解釈者のうちの多数派は人間性についてのホッブズの非観主義に対する反駁を開始したのであった。

ホッブズが道徳家であるという主張には、その確証をほとんどその政治的著作のうちに見出すことはできないが、ホッブズが打算家であったという議論を裏づける証

拠はテキストの中に沢山見出すことができる。先ず第一に、ホッブズの全著作の中には彼が明らかに道徳と打算との間の対立の可能性を見たり、人間は自己利益を超えた道徳原理に従うべきだと言ったりしているような箇所は一つもないように見える。ホッブズが最も道徳家の立場に接近するのは自然法の理論においてであり、特に自然状態においてさえも人々はその契約による協定に固執する義務があると主張する点においてである。けれどもこの文脈においてさえも、ホッブズの自然法擁護論はせいぜいのところ契約に基づく義務を守ることは、少なくとも長い目で見ると、決して自分自身の利益には反するはずがないと主張する議論として理解できるだけである。第二に、ホッブズは明らかに同時代の人々に忠告を与え、人々が手に入れることのできる最良の政治的装置を与えようとしたと思われるし、彼が自己保存を人間行動の究極の動機としたが故に、彼が時代の問題への解決策を提案するに際して打算に訴えたのは自然だと思われる。実際、『市民論』においても『リヴァイアサン』においても、ホッブズは打算に関しては合理的な行為者として振舞う人々がおり、彼の政治哲学は彼らに向けて書かれたのだと主張している。彼の言う、そして彼自身が理性の法則と同一視する自然の法は、打算に基づく合理性の体系のことを指しているように思われる。

最初に、ホッブズを打算家として見る解釈は、彼を道徳家として見る解釈と同様にホッブズを原実証哲学論者と見なす解釈とは両立しない、ということに言及すべきであろう。このことは、打算は道徳とは異なっており、時には人間の動機についての通常の因果論的な説明と容易に調和させることができると考える人々を見落している。カントのような注意深い著作家でさえも、同じように考えた。即ち彼は、仮言的命令（就中、打算の格率）と調和する行為は、人間行動についての機械論を用いて容易に説明できると考えたのである。このような種類の行為は、究極的にはある「性向」（自然の過程の結果として人間の器官にもたらされる欲求であって、命令それ自体によって指定された目的ではない）を満たそうとする目的に仕えるが故に、カントはそのような行為の可能性を説明するためには自由という言葉を持ち出してはならないと信じたのであった。それにもかかわらずカントが述べているように、まさしく目的を欲する者は手段を欲するというのは分析としては真実だという事実は、カントをして打算に基づく行為を疑わしいものにする。通常の科学的説明に従って、もしも人間の動機づけが因果論的体系をなしていると思えなければならぬ——これはホッブズとカント、両人の意見であるが——とするならば、目的を欲することは因果論的には手段を欲することを意味しなければならないであろう。そ

して「目的を欲する者は手段を欲する」という所説は、二つの欲求が因果論的な関係に立つ可能性に依拠しなければならないであろう。というのは、それぞれの欲求の対象は明らかに同じものではないからである。関係は分析的だと言うことによって、カントは目的を欲して手段を欲しないのは不合理ないしは非論理的だと主張しているにすぎない。けれども、このことがたとえ本当だとしても、この主張は、人間が自由であろうとなかろうとそれに関係なく、実際に人間の理性が自分に自分の目的を達成する最良の方法だと示唆する事柄を追求できることを余り明らかにしているとは言えない。

かくして、一般的に言われている、そしてホッブズが言う打算に基づく行為の本質をどう見るかについて、多くの人々の間に誤解がある。というのは打算と道德との間には対立があるために、彼らは打算と性向との間の区別に気づかなくなっているからである。もしも打算という規範が本当に規範（記述的言明ではない）だとするならば、規範に従う人間の能力とは、ある事柄を因果論的にそれを行うよう決定されているからという理由によってではなく、それが行われるべきだという理由によって、行う能力を意味することになるであろう。実際、打算に基づく行為が可能になるためには、道德的な行為を可能にするのと同じような一連の諸条件が満たされなければならない。したがってある理由によって、道德的であるよりも打算的である方が容易だと信じられているけれども、打算的な行為についての理論は心理学に還元されてはならない。こうして、例えばゴーサー (D. Gauthier) は次のように主張した。即ち義務についてのホッブズの形式的定義は、一旦導入された契約は打算に基づく考慮に無関係に順守されるべきだとの道德的義務に配慮する一方、ホッブズの自然主義的な心理学は、自己利益を人間行為についての唯一のありうべき動機とすることによってその倫理学を破壊している、と。それ故、打算と道德とを区別することは、二つの異なった心理学的理論のうちのどちらをではなく、二つの異なった合理性の概念のうちのどちらを選択するかを要求するということ、及び打算か道德か、そのいずれが可能かということとはホッブズの厳密に自然主義的な心理学とは両立しないということとを認識するのが非常に重要である。打算の擁護者と道德の擁護者は、規範体系の二つの競争者としては我々がたまたま有する、あれかこれかの一団の目的ないしは性向（例えば自己利益とか博愛とか）を実現するに際して合理性が最もよく使用されているかどうかについて彼ら自身の間で論争することはない。彼らは、人はその性向に従うのか（仮言的命令の助けを得て）、あるいは理性の命令（定言命令）に従うのかどうかについても論争しない。彼らは、むしろ人が自己利益を追求するの

が合理的であるのかどうか、あるいは合理性は道德とといった別の一団の規範を意味しているのかどうか、という問題に論争を集中させている。どちらの合理性概念が選択されようとも、打算も道德も共に因果論的に決定されていることではなく、行うべきことを指定するから、人は義務の観念を獲得するのである。もしも人が打算を選択するならば、義務の概念は打算に基づく格率に帰着するという事実はここでは何も変更させないし、ホッブズについての打算家としての解釈は、道德家的解釈がそうであるように、ホッブズの自然主義の心理学に依拠していないのである。

理論的には、打算に基づく行為に関する限り存在と当為との区別を否定することは可能である。打算に基づく計算は、意志を決定する通常の機械論的過程に正に「組み込まれ」ていると人は言うかもしれない。換言すると、一般に思考過程を自然化することによって、人は打算も同じように「自然化」させるのである。けれどもそうになると、打算に基づく規範についての議論はすべて、人がどのように行動すべきかを命ずるための方法だというよりは、自己利益に駆り立てられる時に生起することを記述するための方法にすぎないということになる。この場合打算に基づく規範とは、人間という機械に特有な機能のなされ方を記述することに他ならなくなる。しかしながら、ホッブズの著作の中にこのような概念を読み取ることができるかどうかは疑わしい。合理性についてのホッブズの理論は明らかに自然主義的だし、彼にとって推論過程はただちに身体の中に機械論的に生み出される運動に帰着する。また、ホッブズによれば、推論の産み出すものの中には人間の（人間に限らないが）行為の道筋に影響を与えるものがあるというのは真実であるが、それは「最後の欲求」、即ち人間の行動の原因となる意志という行為へと至る、因果論的な一連の精神状況を構成する「熟慮」の過程に参入することによってなされる。しかしながらこのことは、打算という格率をあくまでも守ろうとする心が、打算の「自然化」を完成の域に到達させるようなものを伴ってこのような因果論的連鎖の中に組み込まれているということの意味しない。行為者が本当に自分の真の利益を知っている時には、彼は自動的に真の利益が命ずる一連の行為を行うであろうという見解をホッブズの見解だとするのは完全に誤まっている。それとは逆にホッブズは、人間はたいていその最善の利益に反して行動するし、しかもそのように行動するのは人間に十分な知識が欠けているからではなく、その虚栄心の故に利益についての知識が行為を起こすのに十分な動機とはなりえないからだと信じていたように思われる。たとえ時にホッブズが、人間は「教育」過程によって社会生活に適応するようになるし、更にそうすること

によっておそらく打算に基づく行為を行うようになると述べているとしても、そのことによってホッブズは、人間はいかに振る舞うべきかについての議論によって納得させられる必要があると言っているのではなく、人間はある仕方では振る舞うように訓練されるか、あるいは条件づけられなければならないと言っているにすぎない。次いでホッブズにとってこのことは、人々に彼ら自身の利益に叶う、反駁の余地のない計算を呈示することによってではなく、恐怖という手段によって彼らの中に服従を促進するような、ある巨大な権力が存在しなければならないことを意味する。こうして事実上、打算についてのいくつかの基本的諸要素がホッブズの人間の動機に関する機械論的説明の中に組み込まれてはいるが、これらの諸要素の数は確かに余りにも少ないので、ホッブズが打算自体を自然化したという主張を正当化することはできないのである。

ラバチンスキイは、ホッブズ哲学の意味を解明するための以下の探究において、最近流行の解釈傾向に意識的に反対しようとするし、そして一定の条件をつけてもっと伝統的な見解を擁護しようとする。人間性についてのホッブズの見方を道徳的に非難していることを別にすれば、ホッブズを実証論的の哲学者として捉える伝統的見解はホッブズを道徳家に仕立てあげようとする努力よりもずっと筋が通っているし、また興味深いことだとラバチンスキイは考える。またラバチンスキイは、ホッブズの政治理論を自然主義的背景（前者は後者の中に据えられている）から切り離したり、道徳家による教義か、あるいは打算家による教義かのどちらかをホッブズの教義と見なそうとしたりする試みは不必要でもあり、誤まってもいると考える。ラバチンスキイがそうすることは不必要だと言う理由は、彼がホッブズについての説得的な解釈は、その思想の統一性を否定したり、あるいはその政治理論を道徳体系の上に基礎づけたりしなくとも可能だ、と考えている点にある。ラバチンスキイは、そのような解釈のみがホッブズが実際に述べたことと両立すると考える。更にラバチンスキイがそうすることは誤まりだと言う理由は、この主題についてのホッブズの洞察は、より伝統的な解釈を下すことによって、もっと興味深いものになるという点にある。ラバチンスキイの意見によれば、政治権力の正統性についての問題に対するホッブズの重要な探究は、*de facto* の正統性の問題と道徳に基づく、あるいは打算に基づく考察とが混同されることによって十分に認知されていない。しかしながら結局のところ、自由主義的政治思想の発展にとってホッブズ哲学がなぜ重要かという点、それが実証哲学的、記述的性格を帯びているからである。

三 自然の理論と人間の自然

1 ホッブズの獨創性

ホッブズが提唱した政治的建議を眺める時、人は彼を「自由主義者」として分類するのに躊躇するかもしれない。自由主義的でないように見えるのは、ホッブズの権威主義と、自由主義的政治の前提をなす個人主義とも緊張関係に立つ絶対主権という考えである。実際、自由主義は、封建制による社会分割に対しては民主主義的な敵意を示すけれども、諸個人の上にそびえる国家主権に対して制限を課そうと欲する自由主義は、封建制の下に王に課せられていた習慣と宗教という障害物に難色を示すよりも、たとえ最も民主主義的な選挙であろうとも、それを通じて選ばれた人々によって所有される無制限の権力の方に、より難色を示すであろう。こうしてホッブズを通常の言葉の意味における自由主義から区別させるのは、ホッブズの権威主義ではなく、人工人間からなる絶対主権の主張そのものにある。では、なぜ我々は、我々の自由主義思想の初期の発展についての考察をホッブズから開始するのであろうか。

この疑問への解答は込み入っている。疑いもなく、自由主義思想には17世紀以前にその前例が沢山あるが、それは政治的教義としては新しいし、彗星のように登場して来た。内戦がイングランドに勃発したが、それはもう一つ別の宗教戦争として闘われた。そこでは確かに良心の自由の問題が激しい論争点になったが、それは自由主義の極めて中心に位置する論争点である。けれどもこの論争点は、既に樹立されている教会に服従するようになるとの要求から自由になろうとする、宗教的反対者の要求に起源を有していたから、世俗的な政治原則としては発生しなかった。しかしながら、もしも内戦が依然として宗教戦争に留まっていたならば、40年後のイングランドの政府の支配的な正当化方式が自由主義思想の決定的な勝利を刻印しているということは、ほとんどありえなかったであろう。このような移行を可能にする上で、ホッブズは無条件に中心的な役割を演じている。というのは、政治哲学の課題を改編し、初期自由主義思想に特徴的な問題設定を定義づけたのはホッブズだからである。

明らかにホッブズは、宗教は統治の安定性を維持するための極めて重要な要素だと考えたけれども、彼は政府の正統性——彼は正統性と安定性との間には密接な関係があると見なした——は、宗教的真理（それが政府に支援を与える）による正当化に依拠するとは考えなかった。ホッブズが宗教的信念の真理性ではなく、その立派さと受け入れられやすさの規準として用いたと思われるのが、宗教のもつ正当化の機能であった。勿論、ホッブズ

自身の哲学がどの程度依然として宗教的基礎に立脚しているかについては、様々に議論されて来た。しかしながら彼は、自らの政治への研究方法の独創性は政治哲学を神学によって基礎づけることを拒否し、それに代えて自然科学によって基礎づけた点にあることをほとんど疑っていなかったように思われる。ホッブズは、17世紀の政治哲学は時代後れのアリストテレスの神学というよりも、機械論的方法を採用する近代自然科学に基礎づけられなければならない、ということを認識していた思想家であった。

2 ホッブズの欲求の概念——そのアリストテレス批判

政治哲学の古い哲学的基礎を近代の機械論的自然科学に置き代えることによって、ホッブズは人間の本性に関して根本的に新しい理論を提起することができた。確かにホッブズ自身は、人間研究へと向かうその新しい科学的方法からすべての自由主義的な政治的帰結を引き出したわけではないが、彼の新しい理論は将来の政治哲学が無視できなかったような、自由主義についてのいくつかの基本的な前提を用意したのである。ラパチンスキは、ホッブズが提起したような人間理論が17世紀の自然科学の機械論的前提なしには主張できないとは考えない。けれども明らかにホッブズは、一方から他方を引き出そうとする自らの努力がその理論の妥当性を著しく高めたと思なした。ホッブズが欲求の本質について説明している箇所は、彼の哲学体系に含まれている様々な構成要素の間の相互関係がどうなっているかを最もよく明らかにしてくれる。この箇所ではホッブズは、ガリレオの物理学から得た洞察を基礎として人間本性についての革命的で、自由主義的な面を含んだ理論についての一般的な輪郭——それは次に彼自身の政治哲学の基礎として役立つ——を描き出した。

伝統的な人間理論からのホッブズの急進的な断絶を示す文章は、次の『リヴァイアサン』の箇所に見られる。「生活における至福とは、心が満足して休止することにあるのではない。というのは、古い時代の道徳哲学者達はその著作の中で語っているような、究極目的 (Finis ultimus) とか、最高善 (Summum Bonum) とかいったものは存在しないからである。また、その欲求が尽きてしまった人は、その感覚と想像力が停止してしまった人と同じように、それ以上生き続けることはできない。至福とは、欲求が一つの対象から別の対象へと絶えず継続して進行して行くことを意味しており、前者を手に入れることは依然として後者を獲得するための通路にすぎない。」

「古い時代の道徳哲学者達」とはアリストテレス主義者達のことであり、彼らの人間理論はその神学的世界観の全構造のうちに織り込まれていた。人間の「至福」の内容、即ち人間が努力すべき理想的な幸福とは何かを問うことは、人間ないしは国家の本質——それを実現するのは人間の志を成就することである——とは何かを問うことであった。ホッブズが拒絶しようとするのは、彼らの解答の内容は言うに及ばず、その問題への問い方そのものなのである。

ホッブズが先ず最初に人間心理に関するその見解に到達し、次いでこの見解を支えるのに有用なガリレオの自然理論を発見したのかどうかを、あるいは実際に彼は後者から前者を引き出したのかどうかを考察するのは余り重要ではない。両者が互いに密接な関係にあることを考察するのが重要である。ガリレオがアリストテレスによる運動への静止の優位の主張を斥けたことによって、アリストテレス物理学の全構造と、人間の「本質」という概念で構築しようとした人間像とはその根底を掘り崩されてしまったのである。

欲求についてのホッブズの理論は、このような自然についての近代的概念を背景にして初めて理解することができる。彼は、人間は常に自分が既に所有している以上に欲しがらるものだという、古代人が知っている単純な心理学的観察に基づいて、究極目的とか最高善とかを斥けているのではない。彼の頭を悩ませたのは、ある目的が究極でありうるのか、あるいはある善が最高でありうるのかということではなく、アリストテレス主義者が理解していた意味での究極と最高という言葉の概念そのものである。彼が問題にしたいのは、ある善——それ自体で最も好ましいものとされるような——によって引き起こされる欲求という概念である。目覚ましいほど新しい転換を図ろうとして、ホッブズは、我々が「善」と呼ぶものは欲求との関係で定義されなければならないし、欲求活動の函数だと理解されなければならないと主張する。欲求がいかにもたらされるのかを説明するためには、人間行為のメカニズムにおける動力因を探究しなければならない。結局、ホッブズが主張したいのは、欲求がある満ち足りた状態を越えて行こうとする必然性を有していることであって、アリストテレスが指摘したような、単に人間が現在所有している以上に欲するものだけということではない。ホッブズによれば、アリストテレス的、神学的説明モデルは、人間の行動を説明するためには不適当なのである。

(以下、次号)